

アメリカ旧南部における非奴隷所有農民（下）

——第二次アメリカ革命の構造把握のために——

山 本 幹 雄

一、問題の提起

(一) 若干の数量的考察（以上前号）

(二) Yeoman（以下本号）

(三) One horse farmer

(四) Poor white

三、展 望

二 分 析

(一) Yeoman

レーニンが、「農業に関する資本主義発展の法則における新しき資料」「第一分冊、アメリカ合衆国における資本主義と農業」のなかで次のように書いている。「資本主義は……アメリカ南部の曾つて奴隷を所有せし農業をも『純粹にロシア的』な形の半封建的な農業をも『已に』従属せしめた。これらのすべての場合に、^①おける資本主義の成長と勝利の過程は同一である。しかしその形態は同一でない」と。

われわれが、ここにもちだした旧南部における非奴隷所有農民

の問題も、結局は資本主義発展のこのような過程と形態をめぐる問題に帰着すべきものに他ならない。だから、その分析にあたっては、「農業における資本主義の主要な徴候および指標は、賃銀労働である」という基本的な事実をはつきりと認識してかかれれば足りるであらう。「ただこの際注意すべきは、非奴隷所有農民の集団は直接的形態的には奴隷労働と関係がないにしても、一方で支配階級たるプランター資本家、およびその財産たるネグロ奴隷労働者の集団と対抗関係にたつていたわけで、その意味で、たえず奴隷制との全機構的な視野を失つてはならないということである。」

F・L・オーズレーは、旧南部の非奴隷所有農民の中核体に《Plain folk》という概念を適用して次のようにのべている。「このグループは、小さな奴隷所有農民、耕すべき土地をもつてゐる非奴隷所有農民、フロンティアや、松林

の貧土や山地の多くの牧者《herdsman》、およびセンサスに記録されているように、その農業生産が繁栄、精勤、自尊を示している借地農をふくんていた^⑤と。一方、L・C・グレイは、南部農民のうち、最大限二〇〇エーカーまでの土地をもつ奴隷所有者又は非奴隷所有者の集団に対して、《Yeoman farmer》という伝統的な概念を適用している^⑥。これはオーズレーの《Plain folk》という広汎な概念の上限の階層に相当し、同時に、われわれが第四表（前号）で非奴隷所有農民の最上限として、分析の出発点に求めた部分と相おおう。旧南部の《Yeoman》とは何か。

「アパラチア山系の外側に《Yeoman farmer》達が、田園白人人口の過半数を形成していた。そのあるものは二、三人の奴隷をもち、野良で共に働いた。あるものは、一人のネグロのたすけをかりていた。しかし彼等の大抵のものは、その生活の糧をば全く彼等自身の手のはたらきと、家族成員のはたらきによつて稼いだのである。これらの農民達は、《staple crop》商品作物の生産地域の外で最も数が多かつたけれども、殆んどどこでもみられた。彼等は《Black belt》にも存在した^⑦。F・L・オルムステッド

によつて典型的なヨーマンとして描き出されているルイジアナ州オベルーザ西方の「富裕な」非奴隷所有農民の事情は大体次のようなものである。

オルムステッドの一行がある日曜日の午後宿を求めた時、その家の主婦は牛乳をしぼつており主人は野良に出ていた。家屋は泥でぬられた三部屋からなり、一つは中央の長い部屋で居間となつており、厚板の床がはられていた。あとの二つのうち一つは寝室と台所になつており、一つは床なしの土間であつた。居間にはコネティカット産の柱時計と鏡が二張り、および二三のコップと茶托があり、ほかに北部行商人から買った一寸した奢侈品が少しあるばかりで、肘付椅子以外は家具らしいものはなかつた。野良はよく耕されており、綿をはじめ、とうもろこし、スウィート・ポテト等ありとあらゆる種類の作物が植えられていた。主人は、男二人、女三人からなる五人の奴隷と一緒に野良を耕していたが、その奴隷は、土地のプランターから毎日曜日に一日五〇セント平均で借りうけてくるものである。彼等は日没まで激しく働かされた。夕食は油いための卵、ベーコン、スウィート・ポテト、ミルク、朝食はベーコンとポテトであつた^⑧。

さらに、二、三の史料には次のような記述がある。

「おそらく南部のヨーマンは殆んどいつも貧困である。……一般的なこととして彼等は奴隷を所有していない。……しかし、よし彼等が奴隷所有者であるときでも、彼等は《人間財産 human chattel》にくく僅かの所有権を行使しうるにすぎないようだ^⑨。」

「南部の人口稠密な処をどこでも一日旅行すると、必ず若干の質朴なヨーマンとその子供が、ときには自分の財産であり、ときには月又年借りでやとつた借りもののネグロ達と一緒に働いているのに出くわすものだ。西ヴァージニアの各地、とくにペンシルヴァニア出のオランダ人定着地帯では、こんな光景は殆んどすべての農場でみられる。」^⑩

「またもし、テネシー、ケンタッキー、ミズリーのはたらくもののヨーマンの間をいくと、……無差別にネグロと主人がとなりあつて野良で耕作しているのを見るであらう。」アレガニー山系周辺の事情については、「奴隷州の山地地区には——南北両カロライナ州においても——自分の農場をば、ほんの少しのネグロの助けを借りて、自分の息子と共に耕作している勤勉なヨーマンがいる。これこそ、屈強な、働きのもの、独立した人々で、奴隷州の中核体である。アレガニー山系は合衆国のバック・ボーンであり、その住民はアメリカの力である。」^⑪

これらの史料からすぐわかることは、第一に、非奴隷所有農民の最上限に属する「Yeoman」は、「一方ではそのグループのなかの大多數の農業者が独立経営主に属し、他方では、家族労働者数が賃銀労働者数よりも多いようなグループ」^⑫だということであり、彼等は、少数ながら雇傭労働をその経営に導入することによって、賃労働の搾取者としての階級的性格を、はつきりとあらわしているというこ

とである。しかし、第二に、もつと注意をしなければならぬのは、このグループによつておこなわれる賃労働の導入は、白人自由労働の雇傭ではなく、殆んど例外なくネグロ奴隷の借入れによつてみだされていることである。これは重要な意味をもっている。一般に、「Yeoman」は小規模ながら、「staple crop」たる綿花生産に従事することによつて「Plantation régime」における商品生産者としてたちあらわれた。したがつて、そこでの経済的繁栄のためには、プランター階級と同じ立場にたつて、動物的に、激しく搾取のきくネグロ労働を使用することが必須条件となつていたのである。〔事実、第六表は「staple crop」の生産における奴隷労働のこのような意味あいをもつとも端的に示している。奴隷労働使用の有無と綿花生産量との関係〕二、三人の奴隷をもっていることと、そうでないことの差が、「staple crop」の生産量「Plantation régime」における繁栄度にはつきりと表現されるとすれば、非奴隷所有農民の上層グループがとくに奴隷の所有又は借入れにむかつてはたらくかけるのは当然である。

かくてわれわれは、「Yeoman」とよばれる非奴隷所有

第六表 奴隷所有者および非奴隷所有者の農業活動比較一例
(但しテネシー州 Haywood county)

	奴隷所有者		非奴隷所有者	
	1850年	1860年	1850年	1860年
奴隷 (人)	2	3	0	0
耕地 (エーカー)	45	80	30	50
未耕地 (")	60	120	83	75
地価 (ドル)	700	2,600	300	1,000
農器具 (ドル)	10	50	45	20
馬 (頭)	2	2	1	2
乳牛 (")	3	3	1	4
牧牛 (")	3	20	1	1
豚 (")	20	20	5	20
家畜価格 (ドル)	170	500	70	165
小麦 (ブッシェル)	10	0	0	37
とおもろこし (")	375	375	150	175
燕麦 (")	0	0	40	0
○棉花 (400ポンド詰, 俵)	11	20	1	12
羊毛 (ポンド)	0	0	0	0
アイルランド, ポテト (ブッシェル)	0	5	0	4
スウィート, ポテト (")	10	20	30	100
バター (ポンド)	100	50	100	0
自家手工品価格 (ドル)	0	0	10	0
屠殺家畜価格 (")	40	130	25	70

農民は労働力の諸関係において、家族労働を主体としながら、賃労働を雇傭するものとして、階級的には搾取者の仲間

間入りをしていること、および、『Plantations』経済の制約をうけて、もつばらネグロ奴隷の雇傭と搾取を眼目としていたこと、そしてそのために、彼等の上昇の方向づけが、
「自由賃銀労働や農業機械の導入による資本主義的農業生産者にむかつてはなされず、逆に」前近代的な奴隷所有者にむかつてなされており、本質的にはプランターと階級的なつながりをもつていたことを知った。「この点に関して、ストウ夫人は次のようにのべている。これら非奴隷所有者農民の「最大限の希望は、どんな手段によつても、『buy a nigger or two』(黒んぼの一人二人を買つて)、他の連中のような立場になるに充分な金を握ることである。」と。」^⑩

ところで、彼等はその階級的立場の如何にかかわらず、現実には、「一般にごく僅かの財産よりもたず、その所有地は殆んど普遍的に貧弱で、不毛であるために、ほんの僅かな衣食の糧がその耕作からえられるすべてのものである。しかも、肥沃な土壌は奴隷所有者の手中にあるため、まちがいなく非奴隷所有者の手のとどかない処にあるのだ。」^⑪だからその経済活動もはなはだしく制限せられ、「土地と家畜が資本であり、綿は唯一の収入であり、とおもろこし、塩づけ肉、野菜が日常の糧」^⑫で

あるような閉鎖的なものにおわらざるをえない。そしてこの様なところで「商品生産者として」生き残つていくためには、『Yeoman farmer』とその子供達は日の出から日の入りまで非常にヴァリエティに富んだ仕事をせねばならず、その主婦と娘の苦勞は、「女らしい仕事なんてするひまがない」ということわざに反映されるような、働きのもの一家でなければならぬ。」

しかし問題はこれだけではない。たとえば北ミシシピのヨーマンは、「僅かの綿をつくつたが、彼はそれを「隣人」プラランターに」繰綿し、俵詰めにし、ため、若干の距離を送らねばならなかつた。そしてそれを更に馬車につんで七〇マイルを市場に運んだ。彼は又若干の小麦をつくつたが、それを近隣の製粉工場で製粉してもらい、同じ市場に送つたのである。」又、さきのオベルーザのヨーマンについては、「彼等の僅かな年収は、そこから十マル程はなれた、最も近隣の繰綿所『mill』に数俵の綿を売りこむこと、（プラランターはこれを買いてつて、繰綿し、自己の綿と共に俵づめにし、オベルーザのすぐ近所のニガーヴィルから河蒸気でニューオールリンズの仲買人の手もとに送りこむ）家畜を仲買人に売ること、および近隣の人々に若干の食物をうるることからえられる。ちなみに繰綿料金は一〇〇ポンド当り七十五セント

で、これはプラランターのものとなる」ことが知られている。^⑩

この様なケースは、ルイジアナの甘蔗プラランテーション地区においてもあてはまるところで、ヨーマンは「僅かの甘蔗を生産したが、それを糖蜜と、なまの茶色砂糖につくる機械をもたなかつた」ために、甘蔗の現金化には、プラランターの製糖作業場の使用を殆んど必須のものとしていたのである。

したがつて、『Yeoman』は限られた商品生産活動において、農器具所有の劣勢と、遠隔の市場立地に甘んじていたわけで、そのため彼等は、プラランターの農器具使用に依存するか、プラランターへの『staple crop』の売込みによるか以外には、利潤を獲得する見込みはなかつたのである。^⑪ いわば、プラランター階級に属することによつて、プラランターと利害を共にするか、そこから利潤をひき出すかする形で成立しているのが『Yeoman』の商品生産活動であつたといえる。

階級的にはネグロ奴隷を対象とする賃労働の搾取者でありながら、『staple crop』の生産者としては、プラランター階級と並存しつつその従属下におかれていたということ。

これが《Yeoman》の実体であつた。

(三) 《One horse farmer》

一例をルイジアナ州の農地所有關係にとつてみると、同州における農地所有者総数一七、二八一人のうち、三一五〇エーカーの所有者は、全体の四五パーセントという圧倒的部分をしめていたことが知られており、「一八六〇年」、いわゆる《Yeoman》につづく部分を形成している。「これは、さきにみた第四表のテネシー州の場合とは一致する」R・シャングは似等を《One horse farmer》とよんで、その一般的な特長を次のように指摘している。「農場は、一〇〇エーカーをこえることはなく、五〇エーカー足らずの場合が多く、主にポテトやおもしろこしのような生存必需作物が、主として生産される。『Subsistence crops』をば所有者の家族労働でつくつたと。」

たとえば、ジョージアにおいては、「彼等は、生活することを許されている不毛な土地で、数エーカーの土地をば、女達も男も同じように分担しなければならぬ労働力でもつて耕作する。この方法で彼等は、とおもしろこし、野菜、および家庭の手仕事に充分でまれにはごく少量を市場にもつて行く程度の綿を栽培する」ことが知られている。

ここでまず考えなければならないのは、この階層に属する農民は、もっぱら家族労働一点ばりの独立経営者であつて、労働力をめぐる關係においては、雇傭者でもなければ被雇傭者でもないということである。この關係は、彼等が《Plantation régime》における《staple crop》の生産に殆んどたづさわつていないということと表裏している。「事実、たとえば一八五〇年頃、ルイジアナ州の肥沃な甘蔗地区ラフォルシュの近辺では、二八六家族中一一八家族が二〇エーカー以下の耕地を所有し、この中で典型的な小農民ルイ・チュリオットという三七エーカーの耕作者は、五エーカーに二〇〇ブッシュェルのおもしろこしを、三〇エーカーにスウィート・ポテトを植えつけ、馬四頭、牡牛一頭、豚一六頭をもつていたが、いわゆる《staple crop》は栽培していない。また、たとえば同じルイジアナ州のカルカシューにおけるフランス系農民のうち、二〇エーカー程度の耕地をもつ三一家族の綿花生産量は一三俵で、一戸当り平均〇・三俵（又は一五〇ポンド）これは自家用を意味する。）にすぎない。「食糧生産が《cash crop》に優先権を与えられていたのである。」

《Plantation régime》において、《staple crop》の生産にたづさわらず、したがつてまた労働力の受授關係において搾取者でもなければ非搾取者でもないグループについて

て、その社会構成上の実際の位置を決めるてつとり早い方法は、彼等の経済活動を観察することである。たとえば、ルイジアナ州におけるラテン系農民の大多数はこのグループに属し、家族用のおもしろこしとポテトをつくることとに、少量ながらニュー・オールリーンス市場向けの野菜と米をつくつたし、又たとえば、同州ビーンヴィル近辺では二〇エーカー程度のいわゆる「Truck garden」——野菜園が多数経営され、P・ロドリゲズという典型的な農民は、その野菜を市場に出して年一〇〇ドルばかり稼いでいる。^④

「大抵の農民はバター、ミルク、およびチーズをつくつて自家のテーブルに供したが、しかし、ごく少量のみが市場に売却された。地方および市の市場がないこと、氷の不足、およびより利益ある企業の労働力に対する需要の不足がこの貧弱な生産を説明する。」^⑤

彼等は、野菜、果物、とおもしろこし、小麦、および衣料用の綿を自給するに足る土地を開墾し耕作した。しかし金については、彼等は牛と豚および牧場と森の他の産物を売ることになつてゐた。毎年、彼等はモービル（アラバマ州）で、牛・豚・バター・卵・ひな・家鴨・ハム・および野生の七面鳥を売つて、「それとひきかえに」多くの生活必需品とせたいく品がみたまされたのであ

る。」^⑥ 彼等が折にふれて出向いていく市場では、「白人達は一般にみすばらしいなりをしてネグロ達と余り変りなかつた。大抵の産物は、今まで私が見たうちで最もやせてがつづいた牝牛か馬にひかれた小さな荷車に積まれていた。……大抵の市場に群がる人々によつてもちこまれ、売りに出されているほんの些細な量の品物は、人目をひくもので、一盛りのポテト、三束の人参、キャベツ二個、六ケの卵とひなが、全ての面白い手の一般的な商いぐさであつたようだ。」^⑦

また、これらのグループに属するものうち、「現金が、家畜や森林産物の如き他の源泉からえられる地域において」^⑧

「人々の主な収入は、可成りな程度に行われる牧畜業からえられる。山地の放牧地はあり余る最も良好な飼料を提供した。農民が秋になすべきすべてのことは、非常にふとつた家畜を選び出して、それをチャールストンやボルティモアの市場にかりたてていくことである。」^⑨

事実、たとえばテネシー州におけるこの種の農民は、第七表のような家畜飼育をなすことによつて現金収入をえていたし、また、ミシシッピーおよびその支流のいたるところでは、通りすがりの蒸気船に公有地等て切つた材木を売りこんで僅かの金を儲ける農民もいたのである。^⑩

第七表

		耕地 (エーカー)	馬	牛	羊	豚
H. W.	ハリソン	20	2	400		50
E. B.	ハリソン	25	4	500	30	250
B. B.	ハリソン	15	2	300	41	100
J. B.	ハリソン	30	1	200		100
D. C.	ジーンズ	20	3	226		60

(1850年)

これらのことからわれわれが知りうることは、このグループに属する農民層は、自給自足を本態としながら、もつぱら「Plantation」経済における「staple crop」以外の生産物を通じて商品経済にくみこまれていたということである。如何に小規模なものであろうと、彼等が商品生産者としてたちあらわれている

農器具を購入し、労働者を雇傭し、搾取する余裕を殆んど全くもたない彼等にとつては、結局、自らとその家族をば非常な過重労働にしばりつける以外には、そのたたかいを遂行することができないのである。

「北カロライナの郡で、われわれは、しばしば貧乏な白人農民のあわれな妻が、朝から晩まで野良につきしたが、つて夫の刈取り具からおちる穀物を束ねあげるのをみて来た。」

「女達も男と同じように分担しなければならぬ労働力。」婦女子労働は過重労働のバロメーターであり、それは彼等の小商品生産者としての、脱落に対する必死の抵抗にはかならない。

ということとは、このグループに属する農民層のあり方をはつきりと規定していく。すなわち、「商品経済のいつさいの事情は、小農民が自分の経営の拡大強化のためにたたかわないでは生きてきないようにしている。そしてこの戦いとは、他人の労働力の使用をまし、これを安く使用するための戦いを意味する」^⑤。これが「One horse farmer」達の基本的な立場なのである。

しかし、「所有地は殆んど普遍的に貧弱で」、市場に遠く、

ところで、「Plantation」経済においては、ネグロ奴隷の労働搾取による「staple crop」の大量生産以外には繁栄の見とおしは全く封ぜられており、それは「One horse farmer」達のおよぶべくもないところであつた。だから、彼等がかほど「精勤で」「働きものの」独立生産者であつても、結局は「市場からはるかに離れた全くの田舎の環境で、売るべき余剰もなく、……社会階級の中で上昇する機会を殆んどもたない」立場にあつたわけである。

しかし、それにもかかわらず、彼等の小商品生産者としての立場は、彼等の生活心情をはつきりと規定し、その懸命な勤勞を通じていつの日か、「彼等が獲得した小さな余剰が、一人二人の奴隷の購入〔や雇傭〕に費やされ」て、《*slave crop*》の生産者となりおおせることを待ち望まざるをえなかつたのである。

殆んど到底できない相談なのに、「非奴隷所有者は、彼の貯えが許すや否や奴隷所有者になれて、妻を台所と洗濯の必要から救い、子供を野良働きから救うことができるのだということを知っている」のである。これはたしかに奴隷制《*Plantation régime*》における小農達の悲劇である。

かくて、これらの小農民は労働力展開の諸関係においては、独立生産者として家族労働を最大限にくりつづしながらも、小商品生産者としてたちあらわれることによつて、ついに、「彼等が努力する理想はプランターのそれである」という点に到達する。これがいわゆる《*One horse farmer*》達の階級的立場なのである。

四 《*Poor white*》

われわれはさきに、旧南部の非奴隷所有農民の約30%がセ、ン、ス、上、の《*landless*》＝非土地所有者であることをたし

かめたが、註にのべる如き諸種の資料から判断して、彼等は、主として《*squatter*》＝不法入居者と《*agricultural laborer*》とから成立つていたことがわかる。したがつて、そこから次のことがいえる。すなわち、《*landless*》グループの主内容なすこの一般的概念——《*squatter*》、《*agricultural laborer*》——は、非奴隷所有農民層の最下限を意味するものとして、旧南部社会独自の概念《*Poor white trash*》＝貧乏白人の屑とはほぼ正確に相おおうものと考えられるというところである。事実、たとえばテネシー州における統計的考察によつても、最狭義に用いられた概念としての「《*Poor white*》は、州の如何なる地区においても農業人口の10%」前後であつたことが知られており、数字的にも《*Poor white*》と《*landless*》グループ＝《*squatter*》＋《*agricultural laborer*》とが不可分であることを示している。

いわゆる《*Poor white*》は旧南部の全地域に広く散在していたが、一般に海岸よりの松林貧土《*pine barren*》、カロライナ瀑布線の砂丘地帯《*sand hill*》、ジョージアの知風草地区《*wire-gross region*》、アラバマ、ミシシピー、テキサス等の《*pine barren*》等々の特殊な不毛地に住んでい

た。^③「このようなところが、如何に荒蕪の地であつたかは、たとえば、南カロライナ州の『Pie haren』に関する次のような描写からもうかがいうる。「土地は荒れ果て、人口稀薄で、サヴァンナ市に至る一、二の公道を除けば、殆んど道がなく、道と名のつく小道は、殆んど草におおわれ、非常にうす暗くて、目先がきかないので、旅行者は殆んど気がつかないうちに、そこから森の中にさまよいこむのである……」」

彼等の生活ははなはだ風変わりなものとしてわれわれの興味をひく。いまその生活形態の二、三について観察してみよう。

「フロリダは、狩と漁の天国である。狩と漁は簡単に食物を提供するであらう。そして、もし彼が大層ぜいたくにならうと思えば、土地をひつかき廻すことによつて、若干のスウィート・ポテトや少量のインディアンとおもろこしをば収獲することができる。土地はフロリダ州では一エーカー、一セントで買いとられてきたが、この『Crab』(グリア・ホワイトの別名)は全く土地を買う必要がない。彼は不法入居してなりすますことができる。……このように、彼は自分自身の土地か、天与の土地かどちらかの上にたてこもつて、もし望みとあらば労力と金を殆んどかけないで、収畜者になれるのだ。家畜を数頭買ふか、借りるか、盗むかして、簡単に印をつけて森の中にはなすのである。春には家畜を集めて焼印をおす。そして全くの話、買手が現れた時それらをつかま

える以外はまるで努力もしなければ関心もない。……この安易で怠惰で手放しの生活は沿海奴隷諸州の凡ての『Poor white』の間で非常に一般的である。しかしフロリダでそれが頂点に達するようにみえる。鳥獣の豊富さと土地の安さが、隣接諸州からの多くの意け者をここにひきつけるのである。」

中部ミシシッピーにおいては、「これらの人々の一家は、通常小さな丸太小屋を借りるか、不法入居するか、建てるかするであらうが、その小屋は全く雨をしのぐだけの隠れ家で、壁はすき間だらけで、独房で罪人に与えられる程度の家具と、娯楽の楽しみをもっているにすぎない。彼等は少しのおもろこしを栽培し、おそらく $\frac{1}{4}$ エーカー程度のポテト、『Cowpeas』および野菜をつくる。彼等は二、三頭の豚をもち(それは餌を森で見つける)、大抵、鉄砲と犬をもっている。そして男は……表向きは大抵の時間を狩猟にすごすのである。」

北アラバマの『Poor white』の一人「ブラウンは大家族を抱えて山の小さな小屋に住んでいた。彼は一うねのおもろこしをつくるといつていたが決してそれをせず、全くとおもろこしを収獲しなかつた。大体、彼は盗みとるとおもろこしと豚と鳥獣で生活した」^④ことを彼等の仲間が認めた。……更に「私は、こんな浮浪者が多いのかと聞いたが、『山には滅法たくさんいて、ごたごたをおこしている。』」と答えた。また連中は今一人の男のことについて、「あいつは狩以外の仕事は何もしない。そして鹿や七面鳥、一年仔の獣をたくさん殺した」ことを認めた。^⑤また彼等との一問一答は次のような経過をみせている。

「どうして貴方達はここに住むのか？」あくびをしながら、『そうだね、魚がたくさんいて、季節が爽りどきになれば、何もせず、太平樂をきめこむのがえもいわれないんでね。しかし最近はお釣も一寸ひまだね。全く土地は滅法貧弱すぎて、耕す必要がないんだよ。だがね、あん畜生の豚は、クリスマスには全くもつていい肉にならあね。品種がいいんだ。ここじあまともな豚でなくちや死んじやうからね。』無知と怠惰がどこでも同じ結果を醸成し、しかも不潔なこの連中は、ここでは都市における同じ階級よりもずつとましである。ここでは、彼等は少くとも、太陽、新鮮な空氣、水、そして樹木に恵まれている。」

ルイジアナ州における《Poor white》達も、河川と文明とから遠く離れた砂つばい土地に「うねのおもろこしをつくり、森に家畜を放し、狩獵を行つていた。『pine wood』における生存程安易なものはない。そこでは殆んど労働の要求がなく、住民は殆んど働かないで、怠惰、健康、貧乏に満足している。」

これらの《Poor white》に代表されてゐる《Landless》グループは、われわれがすてにみた他の農民グループとははなはだしく異なつた存在である。彼等は、「プランターでもなければ《Yeoman farmer》でもなく、不自由労働力「ネグロ奴隷」の一部でもないため、「部外者」であつた。

機構の外にあつて、彼等は原始的な經濟生活、すなわち手

から口式の手段で出来るだけうまく自分の慾望を満足させる貧素な生活を営んだのである。」^⑤ここでは農業は最早經營としては意味をなして成立してはいない。それはただ、彼等が動物的に生きるためのものとして場当りに営まれているだけである。彼等の関心のまとは魚や鳥獸が豊富なことや、家畜の放し飼いや、時によつては盗みなど、要するに「怠けものの天国」なのである。われわれはさきに、「働きの」の一家が《Plantation》經濟の中で懸命に經濟的な抵抗を試みていることをみたが、ここでは最早そんな姿のかけらも見出しえない。

これは二つの意味をもつてゐる。第一に、彼等は商品生産者として殆んど完全に失敗し脱落しているということである。このことは彼等の階級的な性格を根本的に規定する。彼等が商品生産者として破綻してしまつてゐるということは、農業がもはや主産業でなくてよいということを意味し、そのために、家族の全労働を過重労働に追いこんでまで農業經營を維持することは放棄され、生活の維持のために他のような仕事にも関心をむける用意があることを意味する。つまり、階級的には「儲われる」状態に

あつてプロレタリア化してゐるのである。これが旧南部
《Vandless》農民の基本的な立場である。

しかし、ここから第二に、プロレタリア的というこの基本的な立場が、現実には奴隸制《Plantation regime》とかかりあつてどう展開されているかという問題がでてくる。これは、具体的には彼等の労働のあり方の問題でなければならぬ。

北カロライナのファイエットヴィル地区の松林の《Poor white》をみると、「彼等のうちにはまるきり無教育で貧乏にうちひしがれた《Vagabond》——浮浪者がたくさん存在している。(大多数がそうだと思うのだが) 浮浪者という言葉で、単に恒常的、決定的な生業や、依存しうる生活手段のない人々を意味する。彼等は貧困で、自らの肉体以外に殆んど何の財産もない。そしてその肉体の駆使すなわち労働については、彼等は賃銀によつて資本をうるために、定期に、正規に雇傭されることになれていず、僅かに必要としせまつた時に日傭い又は一仕事単位で時々傭われるだけである。……彼等が衣料その他を購入する金が入用となれば、その金を、鳥獸、肉類を売るによつてえるのである。もし彼等が、その余裕が全くないか不十分な時には二、三日隣りの農民のところへ働き、普通その労働に対して一日五〇セントで満足するのである。ある醸造業者は、……こんな連中はやといたくない、というのは彼等は引うけた仕事を仕上げるということに

信頼がおけないし、命令に従つて働くことにも信頼がおけないし、又白人であるために、「奴隸のように」《drive》——(こき使う) ことができないからであるとのべた。いいかえると彼等の労働は能率が低く管理しにくいのだ。」

ヴァージニアにおいては、「私は、ここでは月ぎめでやとわれてゐる白人労働者は殆んどいいことを知つた。生活のため労働しなければならぬ《Poor white》は、どんな雇傭にも定期的な働くことはしない。彼等は通常、船の荷役に従事する。小さな流れや、運河を航行する平低船の労働者にやとわれるが、長かろうが短かろうが一度に一航海以上はやとわれない。「賃金は」航程の終りに日給計算で支払われる。その賃銀は「一日」五〇セントから一ドルで需要と個人的能力によつて差がある。収穫時には、大低の田舎の《mediocres》機械職人は一日一ドルで農民にやとわれるが、それは彼等の普通のかせぎが、これ(一日一ドル)より可成り少いことを示している。収穫時以外の時には職のない《Poor white》は、ときには一仕事いくらで農民のために働く。しかし、しばしば何等かの正規の労働ではなくて、垣や標識をこしらえたり、土地を清掃したりして働くのである。」

北アラバマでも同じことである。「労働者の賃銀はここでは一日五〇セントから一ドル、一月八ドルである。『一年いくら?』『彼等は絶対に一年契約ではやとわれない。』『一年七五ドルにはなるだらうか?』『まあ、どつちみちそれ以上にはならないだらうが、ここでは収穫時だけにやとわれるのが人々のおきまりだからね。実際は賃銀だけでは一年のうち六ヶ月は生活費をかせぐ

ことはできないのだ。』『しかし収穫時だけやとわれるこれらの連中は、そのあとをどうするのかね？ 連中はあとの八―九ヶ月生きるに充分な金を二、三ヶ月のうちにかせがねばならないんだね？』『そう、連中は時々仕事にありつき、一ヶ所からよそへいくのだ。』『しかし、冬は生活費を支払うに充分な仕事がないというじゃないか？』私が質問をつづけていくと、その男はとうとう、『全くの話はこうだ。ここでは収穫時以外は、何か働きをしようとする人間は一人もいない。連中は、あなたのところみたいにお働きつづけないのだ。』『しかし、連中は、「自分の」とり入れをしなければならぬだろう？』『そう。自分の農場をもっている連中はとりいれに従事し、その世話をやぐが、農場のない連中は、高賃銀（一ヶ月八ドル）がとれるとりいれ時のほかは働こうとしない。』

テネシー州における『Poor white』の一家族についてのセンサス係のコメントは、『これらモルガン一家は非常に野蠻な状態で、アレガニー山系の中腹に住んでいる。彼等は畝で土地を耕すことによつて少量のおもろこしを栽培した。時には彼等のあるものは、郡におりてきて、「一日働き、とおもろこしを売る」と言いた。』『white poor man』は『work like a nigger』（黒んぼみたいに働く）ことを輕蔑する。彼はその代りに猟銃と釣竿で生活することを試みる。もしこれが失敗すると若干のスウィート・ポテトを植えるか町の附近でのらくら暮して、正規の労働のさだめをもたないはんばな場当りの仕事をする。彼は正規の職を憎み、金持の隣人たるプランターの奴隷と競合しあい、おそらくは負けてしま

うような鍛冶屋や大工になる意志はない。』^⑨
つまり、彼等は「労働者」として雇傭されていたわけであるが、その「傭われ方」は場当たりて、計算の単位がまちまちで、仕事不足で、要するに不定期労働の様相をはつきりと示している。『Vagabond』。この言葉が彼等の実態を巧みにあらわしている。

ところでこの際更に問題となるのは、彼等が天性の『Vagabond』であつたのか、又は何かの事情でそうあらざるをえなかつたのかということである。これは旧南部における白人労働の一般的なあり方にかかわる重要な問題である。

ニュー・ハンプシャー生れの女教師で、ながらくジョージアで教えたエミリー・P・パークは、ジョージアの『Poor white』の女の家を訪問した時の様子を次のように書いている。「午後、彼女は、私に機からとりたての一まきの衣料をみせてくれたが、彼女の話によると、それは綿の種からはじめる彼女自身の一生懸命の仕事の金収獲であつた。自分でつくるよりもずっと安く衣料を買うことができないのかという質問に答えて、『若し私の時間が他の仕事に役立てうるなら、そうできるでしょうが、私がやるような金儲けの仕事は何もありません』と答えた」と。そしてまた、『もし彼等が、獣よりましな何らかの生活をしようとし

いう望みをいだいても全くだめだろう。というのは、南部における現在の諸制度と社会状態は、心身ともすべてのエナジーをむだにするように仕組まれているからである」と書いている。

彼等は、決して働く意志のない天性の《Vagabond》ではない。それどころか、むしろ、たえず「金儲けの仕事」に注目している人々なのである。このことは忘れられてはならない。しかし、それにもかかわらず旧南部においては、同時代の女教師が見破つたように、働く意欲の実現が殆んど徹底的にはばまれるような仕組が出来上つていたのである。その理由ははなはだ簡単である。奴隸制《Plantation régime》下の労働力については、「農民達は、殆んど完全に自己のネグロに依存していた。彼等が手助けに白人労働をやとうのは収穫においまくられる時だけであつた」からである。M・R・メル女史はこの關係を明快にえぐつてゐる。「プランターやヨーマン達によつて所有された不自由労働力は、実際には農業その他の労働者に対する一切の需要を満たし、賃銀労働に殆んど「入りこむ」余地や機会を与へなかつた。したがつて経済組織の中には、プランター、ヨーマン・ファーマー、およびネグロ奴隸が存在

した。組織の外では、労働のほかに売るべきものをもたない《Poor white》の群が存在した。そして、その労働市場は、ネグロ奴隸の存在によつて殆んど完全に閉ざされていた。不自由労働の非常な過重は、《Poor white》をば組織された経済生活にくみいれるようなメカニズムをもつた正規の賃銀組織の創設を阻んでいたのである」と。つまり、ここではネグロ奴隸によつて、白人による自由労働が余計なものとして「組織の外」におかれ、その吸収が殆んど完全にはばまれているのである。これは《Vagabond》達の働く意志を越えたいきびしい事実である。

《Landless》グループのこの状態——農業生産者として脱落し、プロレタリア化しながら、奴隸制に阻まれて殆んど雇傭の機会を奪われている状態——は、彼等の事実上の立場を、はなはだしくあいまいなものにしていく。すなわち、旧南部にあつて右のような状態で生きるためには、いわば文明以前の「怠けものの天国」にもぐりこんで、豚と、とおもろこしと、魚と、獵銃とで生活していくよりほかに手がない。しかし、それでも、彼等はそこで、土地と森と河とを所有し利用して、他人に《live》——「こきつか

う)』されること、《work like a nigger》＝「黒んぼみたいに働く」こともなく、一寸したあるじとなつて生活していきうるのである。このことは、さきの史料における彼等の会話からはつきりよみとれる様に、彼等の階級性に関する基本的な自己認識をば、はなはだあいまいなものにしていくのである。——これが非奴隷所有農民の最下限、《Undress》グループの一般的な立場である。

われわれは、ここに、アメリカ旧南部における非奴隷所有農民の基本的な分析をば一応完了した。この分析は、その階級性——労働力または、商品生産の諸関係——を正確にとらえること、それが奴隷制《Plantation régime》の中でどう制約されるかをみきわめることに主眼がおかれたその結果を要約すると次のようになる。第一に、非奴隷所有農民の最上限をなす《Yeoman》は、ネグロ奴隷の雇傭によつて《staple crop》の小規模生産にたづさわりの、それによつてはつきりと賃労働の搾取者となり、プランター階級のもとでそれと利害をともにする立場にあつたこと。第二に、それにつづく《One horse farmer》は、労働力に

関しては独立農民でありながら、ごく小規模な《subsistence crop》の商品化をおこなうことによつて小ブルジョアの立場を固執していたこと。第三に、非奴隷所有農民層の最下限にあつて、《Poor white》に代表される《Undress》グループは、はつきりとプロレタリア化しながら、なお殆んど無償に近い生産手段をもちつづけるというあいまいな立場におかれていたこと。そして第四に、これら非奴隷所有農民層全体が、《Plantation régime》のしめつけによつて近代化＝資本主義化をさまたげられ、「真の意味では、奴隷制によつてネグロよりもつとひどく奴隷化されていた。」のである。

これらのことから、旧南部の《sectionality》形成に関する以下のような若干のみとおしがひらけてくるのではなからうか。

三 展 望

「小農民は資本主義の下においては——彼が欲すると欲せざるとを問わず、又彼が自覚するとせざるとを問わず——商品生産者とな

る。そしてこの変化のうちにこそ、問題の全本質があるのだ。一たびこの変化を蒙るや、未だ賃銀労働者を搾取せざる時においても、彼は矢張りプロレタリアートの対立物となり、小ブルジョアとなるのである。彼はその生産物を売る。プロレタリアはその労働力を売る。階級としての小農民は、農業生産物の価格の騰貴を欲せざるをえない。そしてこのことは、彼等が大農民と共に地代の分配に参加し、地主と協同して爾他の社会に反対して立つことと何ら撰ぶところがない。」

いわば「資本制生産に先行する諸形態」の一つとして、奴隸制社会の形をとつてたちあらわれながら、それが資本主義発展そのものと不可分に結びあい、深くその侵透をうけていた旧南部にあつては、たとえば、奴隸の所有と直接つながらない社会層——非奴隸所有農民（インディペンデント・ファーマー）のあり方は、典型的資本主義社会における右の事情にはなほだ接近する。いまこれを、われわれの「分析」にむすびつけて要約すれば次のようになるであらう。「典型的な〔旧〕南部農民は、非奴隸所有者か、小奴隸所有者であつた。彼は、大プランターになる日を望んでいる野心的な気質の人であらうと、大多数の場合の如く、その地位に満足していようと、その隣人、すなわちプランテーション貴族（プランテーション・アristocracy）と共通の名分をもとうとい

う頑固な傾向を示したのである」これはただに《Yeoman》にかぎつたことではない。それにつづく独立農民——《One horse farmer》をも、「奴隸労働を守ることは、南部の奴隸所有者の繁栄を守ることであるのみならず、《Independent farmer》の繁栄を守ることである」という立場にしつかりとしばりつけていたのである。たとえば、一八五四年に、南カロライナ州生れのH・Rヘルパーが、旧南部の非奴隸所有農民（インディペンデント・ファーマー）がおかれてゐる立場をかなり正確に分析し、『させまる南部の危機——それに対処する道——』を書いて反奴隸主斗争を説いた時に、共鳴はおろか彼等の強い非難をさえあびた事実、彼等の階級的な性格をはつきりと物語つてゐる。

しかし、この点については、最も貧困な《Ameliorist》グループに関する問題が残つてゐる。これは旧南部の《slavery régime》そのものと結びあわせて考える必要がある。

一体、奴隸がネグロであるという事実が旧南部でどのような働きをしたかは、南北戦争直後における回想者によつて余すところなく語られてゐる。

「南部の真の希望にかえらう。真の希望、それは新しい同盟者

と新しい権力をもつて白人優越へのたたかきに入ることである。そして、それによつてこの国の最も古い政治的伝統の保存を図ることである。《white》とて勝利の言葉であると北カロライナ州の一新聞はのべているが、われわれはそれを二度もくり返していいないでおこう。それは未来永劫変ることもなく、間違ひもなく抑制しがたい人種の共感である。南部がその非常事態の必要時に最後に助けを求めるのはこの本能なのである」と。

この社会心理が、文化社会史家 R・G・オスターワイスがいうように、非奴隷所有農民^{non-slaveholding farmers}に対して「その運命に一層満足せしめるような社会構成に対する永久的なよりどころを提供したのである。」しかし、たとえば《Landless》グループとして無産化している社会集団にとつては、次のような事情から、これがもつともきびしい形であらわれてくることは注目すべきである。

すでに四〇年代のおわりには、「教州で、就中ヴァージニアで白人労働者たちが、マスターがすべての有色人種を解雇するまで、その職場に復帰しないように誓約したストライキ」が頻発しているし、「また、北部から奴隷州へ移つた多くの白色職人も「ネグロの職人が主人に優先的に使われるので」彼等の仕事の一切の戸口はとざされ」ていたのである。黒人による労働市場の独占は、《Poor white》の生活感情に強く影響する。一女教師はかいてゐる。《poor white》の「両親に、子供達を有益な仕事につか

せるよう納得させる努力がなされたけれども、もし彼等がそうすれば、息子達は奴隷共と一緒に職場で働かねばならない。そして、有色人種と同じレヴェルにおかれるということは、したがうことができない墮落であると感じるのだ。したがつて彼等は息子をそだて上げて狩猟や漁撈にやることをえらぶのだ」と。事実、伝習的にネグロにあてがわれていた仕事に白人をやとい入れることは、雇傭者、被雇傭者双方にとつて屈辱的に感ぜられたのである。

すなわち、彼等は、一方ですでに潜在的失業者予備軍を構成しながら、他方、労働市場においては、たえずネグロと競合し、そこから閉めだされていたために彼等をそのような状態においこんだ《slavery régime》そのものへの本質的な反省（最終的にはネグロとの握手による反奴隷主斗争）は芽ばえず、逆にネグロに対する反撥と憎悪をつくりあげてしまつたのである。しかも、彼等が実際には「怠け者の天国」における一寸したあるじであつたため、その憎悪はひどく激しいものとなり、ついには「奴隷制は必要不可欠なものであるとする確固たる信念となつて表れたのである。」これはつきつめたところ次のようになつて彼等の行動を決定する。すなわち、「彼等の「社会的に」未熟な心にとつては、プランター階級の継続的な優越よりも、さげすまれた

ネグロの可能な解放の方がはるかに大きな社会的、経済的な危険をつきつけたのである。「彼等の」階級特性は、彼等自身とネグロの間の境界線によつて表現されたのである。^⑧——これは、もはや「landless」グループですらも、その階級の本質を越えて、奴隸主権力を肯定していくことを示唆している。

こうみてくると、たとえば「われわれの間の最も貧困な、非奴隸所有者の利害は、彼のより恵まれた隣人「ブランチ」と共通の名分をもち、その奴隸財産防衛の最後の塹壕で死ぬことなのだ」という同時代の知識人デューボアの言葉や、「凡ての奴隸州においては、大多数の非奴隸所有者たる投票者が存在するが、彼等は南部の諸制度に献身している。彼等は南部の諸制度を命をかけて防衛するであろう。そしてこの問題については、南部は、一個の綜合された人間なのだ」という同時代人R・J・ウォーカーの言葉も、あなたがち誇張とのみは考えられないであろう。また、たとえば旧南部の大立物J・C・カルフーンが第30議会のべた派手で厚顔なデマゴギー、「我々にとつて、社会の二分派は富める者と貧しい者ではなく、白人と黒人

とである。白人は富める者も貧しい者もすべて上層階級に属し平等に尊敬され取扱われる。そこからは貧乏も不幸も奪うことができない地位と誇が生れるのである」という言葉も、右のような事情を考えればかなりのリアリティをもつものとして差支えないであろう。^⑨

事実、たとえば四〇年代において、民主主義運動「Pro-pulse」が最も活潑化したのはルイジアナ州であつたが、その運動はせいぜい腐敗選挙区の調整運動にすぎず、しかも急進的といわれた「Red river democracy」の指導者であり、この運動の推進者であつたS・ドーンズは、次のようにのべて非奴隸所有者大衆の立場を表明している。「貧民階級からの危険は全く存在しない。……貧民は過去においてたえず金持の財産の擁護者であり防衛者であつたし、未来においてもそうあり続けるだろう。財産と金銭は力である。財産と金銭は、いやしいあわれな奴だとの口実で、貧民の政治的発言を封じなくとも、貧民に対してたえず充分な支配力をふるうものなのだ」と。

これらの事情は、われわれがすてにみてきたまづしい、白人たちの社会的階級的なシテュエーションを反映したものの

と考へてもあながち拡張解釈とはいえないであらうし、それはまた、旧南部の「地域性」形成へのみとおしをきりひらくものとして考へてさしつかえないであらう。

われわれは、第二次アメリカ革命の構造把握のために、

旧南部の「地域性」に関する社会構成的な考察を重視し、主題を非奴隷所有農民にもとめて分析をすすめた。その結果、彼等の実体を大まかにするとともに、彼等が《Leavery Regime》の制約をうけて、みづからの収奪者、プランテーション貴族達と名分を同じくするつよい可能性をもつていたことを指摘することができた。これは「頑固な南部」形成の問題に興味ある事実を提供するであらう。(完)

⑮ ニコライ・レーニン 訳「農業に関する資本主義発展の法則における新しき資料」「第一分冊アメリカ合衆国における資本主義と農業」一八五、一八六頁

⑯ 同著、二七二頁

⑰ Owsley, F. I., op. cit., pp. 7, 8

⑱ Gray, L. C., op. cit. Vol. I p. 481 以下の旧南部農民の階層

わけを参照。

⑲ Den Hollander, A. N. J., op. cit. p. 405

⑳ Olmsted, F. I., The Cotton Kingdom, a traveller's observations on cotton and slavery in the American Slave State, 1861 pp. 322—325 ちなみにこの史料集は、オームステッドの旅行記 (1) A journey in the seaboard slave states, 1856, (2) A journey through Texas, 1857 (3) A journey in the back country, 1860 の抜粋合本である。

㉑ Olmsted, F. I., op. cit., p. 227, 228, 231

㉒ Callender G. S., op. cit., p. 811 Stirling, Letters from the slave states. 1850

㉓ ニコライ・レーニン 谷村・松村訳 農業における資本主義 (国民文庫) 他

八篇のうち、現代農業の資本主義的構造、九四頁

㉔ 農民層が一方で農業労働を雇傭するグループをかかえていることは、他方で必ずそれに応ずる農業労働者をかかえていることになるわけで、旧南部でもこれは論理的に当然ありうる現象である。したがって、ここでのいちはいく、何らかの形で白人労働者の存在が問題とならねばならないが、いま特にそれを問題としないうのは、のちにふれる《Landless》グループの分析において充分とりあげるからである。

㉕ Clark, B. H. op. cit., p. 177

㉖ Show, H. B., Key to Uncle Tom's Cabin, 1853, p. 185

㉗ Helper, H. R., op. cit., p. 164

㉘ Shuggs, R. W., op. cit., p. 104

㉙ Den Hollander, A. N. J., op. cit., p. 406

㊱ Olmsted, F. I., op. cit., p. 356

④① 註④を参照

④② Shugg, R. W., op. cit., p. 77

④③ 「だから彼等は『一見『働き者の一家』で、『ぜいたくにも、赤貧にも無関係の水準で生活した』ようにみえるけれども、(Den Hollander, A. N. J., p. 406) 実際は自由州における同じ階級に『day by day』はなはだしく見劣りする水準の生活をしてゐたのである。『多くの欧米の旅行者が、奴隸州における農民およびプランター達の粗野な丸太小屋、自家製の衣服、粗末で單調な食事、リクリエーシヨンの一般的な欠除について評言してゐた』」(Den Hollander, A. N. J., op. cit., p. 406)

④④ Shugg, R. W., op. cit., p. 321

④⑤ Shugg, R. W., op. cit., p. 77

④⑥ American History told by Contemporaries vol. IV, p. 60

④⑦ Shugg, R. W., op. cit., p. 98

④⑧ Shugg, R. W., op. cit., p. 101

④⑨ Weaver, H., op. cit., p. 60

④⑩ Shugg, R. W., op. cit., p. 101

④⑪ Shugg, R. W., op. cit., p. 99

④⑫ Owsley, F. L., op. cit., p. 158

④⑬ Owsley, F. L., op. cit., p. 72

④⑭ Olmsted, F. L., op. cit., p. 22

④⑮ Weaver, H., op. cit., p. 98

④⑯ Owsley, F. L., op. cit., p. 46

④⑰ Weaver, H., op. cit., p. 58

④⑱ Weaver, H., op. cit., p. 59, Shugg, R. W., op. cit., p. 46

④⑲ 谷村・松原訳『農業における資本主義(『国民大庫』)他八篇 現代農業の資本主義的構造 九七頁

④⑳ Helper, H. R., op. cit., p. 229

④㉑ Den Hollander, A. N. J., p. 411

④㉒ Clark, B. H., op. cit., p. 152

④㉓ Carpenter, J. T., The South as a conscious minority, 1880, p. 10

④㉔ Den Hollander, A. N. J., op. cit., p. 410

④㉕ ここにいう『landless』という概念は三エーカー以下の名目的な土地所有をさしているわけであるから、実際には全然土地をもたぬものと、三エーカー達の土地をもっているものと、不法入居等によつて実質的には三エーカー以上の土地所有者となつてゐながら、名目的には、土地所有者として扱われてゐないものと三つのグループをふくまねばならぬ。とすると、このグループの具体的な把握はなほ厄介なようにおもわれる。さうなのは、『借地農(Sharecroppers)』收穫分配農(『農業』労働者『squatters』不法入居者が農業人口における『Landless』『非土地所有者』を構成してゐる。その各々が、どの割合で存在したかを決定的にいうことは不可能である(Clark, B. H., op. cit., p. 31)からである。しかし、それにもかかわらず、われわれは、『農業人口における『Landless』の基本的な部分は、不法入居者と農業労働者であつたとして誤りではないように思える。何故なら、たとへば旧南部の耕地面積が一八五〇—一六〇年に約二千万エーカー近くふえた(『Owsley, F. L., op. cit., p. 49』)ことからうかがえるように、まだ公有地が大量に存在

しているところでは、新南部〔南北戦争以後前世紀末頃迄の南部をさす概念〕でみられるような条件の悪い借地農や《Sharecrop pers》が発生する余地は少く、人々は勝手に《squatter》としてくからである。〔第一、三エーカー以下の借地などは、農業経営的見地からは殆んど考えられない。事実、ルイジアナ州のタレイボーン地区では農民の1/3が公有地における《squatter》であつたし〕（Shuggs, R.W., op. cit., p. 102）大土地所有者の中には開拓による地価の値上りや政治的な思惑から、自己の所有地における《squatter》の存在を歓迎したものもあつた位である。（Gray, L. C., op. cit., p. 487）また一方、たとえば、これらのものの中には「手から口」の生活をするに足るだけの土地を占居するだけで、それ以上の農業経営活動をしようにとはしない農業労働者が存在したであろうことは充分推測できるからである。〔一八五〇年のセンサスレポートによれば、この種の《outdoor laboree》が二万五九六八人（但し十五才以上の白人男子）いることになつてゐる。Helper, H.R., op. cit., p. 288）

⑥⑧ これは旧南部独自の概念として、プランターやネグロに対する貧困な白人を意味するものとして漠然とつけとられてゐるが、「ききに引用したマルクスの「まづしい白人」という言葉もこの用法をうけついでいる」実際には、この概念の適用をうけるべき社会層はきわめて限られていたものようである。ただ、これが、旧南部における歴史的社会的背景から自然発生的に用いられてきたために、社会経済的に厳密に内容をきめることはできない。

⑥⑨ Weaver, B. H., op. cit., p. 61

- ⑥⑩ Craven, A., *The Coming of the Civil War* 1950, p. 28
- ⑥⑪ Olmsted, F. L., op. cit., pp. 291-292
- ⑥⑫ Cairnes, J. F., *The slave power. its character, career and probable design: being an attempt to explain the real issues involved in the American contest*, 1863 (second ed.) p. 369
- ⑥⑬ Olmsted, F. L., op. cit., p. 147
- ⑥⑭ Olmsted, F. L., op. cit., p. 391
- ⑥⑮ Den Hollander, A. N. J., op. cit., pp. 412-413
- ⑥⑯ Shuggs, R. W., op. cit., p. 45
- ⑥⑰ Mell, M. R., *Poor white of the South, "Social Forces"* vol. 17 No. 2, December, 1938, p. 159
- ⑥⑱ Olmsted, F. L., op. cit., pp. 146-147
- ⑥⑲ Olmsted, F. L., op. cit., p. 64
- ⑥⑳ Olmsted, F. L., op. cit., pp. 396-397
- ⑥㉑ Clark, B. H., op. cit., p. 42
- ⑥㉒ Cairnes, J. F., op. cit., p. 374
- ⑥㉓ *American History told by contemporaries*, vol IV, p. 61
- ⑥㉔ Olmsted, F. L., op. cit., p. 374
- ⑥㉕ Mell, M. R., op. cit., p. 158
- ⑥㉖ 資本主義工場制度が発展すれば、これらの人々がすべてを組織の中に必然的にくみこまれることはとうまでもなく。現にアメリカンでは、《Cracker》の名で呼ばれる《poor white》の娘達が綿工場に雇傭されて働いてゐたことが知られてゐる。Olmsted, F. L., op. cit., p. 213

⑥㉗ Randall, J. G., *The Civil war and Reconstruction* 1937, p. 73

- ⑤⑥ ニコロイ・レーニン農業における資本主義「農業に関する資本主義発展の法則における新しい資料」「第一分冊アメリカ合衆国における資本主義と農業」二六〇、二六二頁
- ⑤⑦ Osterweis, R. G., op. cit., p. 18
- ⑤⑧ Carpenter, J. J., op. cit., p. 10
- ⑤⑨ Phillips, U. B., The Central theme of Southern history, American Historical Review, vol. XXXIV Oct., 1928 引用
- ⑥⑩ Osterweis, R. G., op. cit. p. 17
- ⑥⑪ Documentary History of American Industrial Society, Vol. II plantation and frontier. pp. 366-367
- ⑥⑫ American History told by contemporaries, Vol. IV p. 62
- ⑥⑬ Olmsted, F. L., op. cit., p. 87
- ⑥⑭ Back, P. H., The poor whites of the ante-bellum South, Amer-

- ican Historical Review, Vol. XXXI Oct., 1925
- ⑥⑮ Clark, B. H., op. cit. pp. 10-11
- ⑥⑯ Phillips, U. B., op. cit. 引用
- ⑥⑰ Congressional Globe, 30th Congress, 1st session p. 492
- ⑥⑱ U. B. フィリップスは「白人優越主義こそ「南部史」の中心課題」であると指摘して「そうでなければ、多数の非奴隷所有者の激しい分離主義と、南部連邦軍における幾万人もの熱烈な敵意を説明することができなく」と言っている。Phillips, U. B., op. cit.
- ⑥⑲ Shuggs, R. W., op. cit., p. 127 なまハイムアナ州の政治とインディアンとの動向に Shuggs, R. W., op. cit., chap. V. Comment by Gentlemen 参照。

史学研究会例会

日時 四月廿三日(土) 午後一時

場所 京都大学楽友会館

講師並に演題

晩年のマイネッケ

播州平野の条里について

漢簡の資料的意義

岡 部 健 彦 氏
谷 岡 武 雄 氏
森 鹿 三 氏